

## 蜜蜂と俗信<sup>1)</sup>

—観察されるミツバチ—

野島利彰

前回「森に蜜を集める人々」を書いている際に気付いたのであるが、ドイツではかつてミツバチに対しかなりの畏敬の念が払われていた。例えばクリスマスや新年が来ればそれを告げ、結婚した者があれば新郎新婦をミツバチに紹介する。ミツバチの飼い主はふつう男性に限られる (Bienevater) が、彼が死んだ場合にはそれを巣箱に向かって報告し、新しい担当者が決まればそれもまた報告する。ある地方ではミツバチに出会ったら帽子を取って挨拶さえする。ミツバチに対するこのような態度に類するものを日本の家庭において見付けるとすれば、私の思い付く限りでは仏壇や神棚に対する場合でしかない。動物に限るとすれば庭の一角に祀られたお稲荷さんのキツネかもしれない。しかしキツネは神の使いであるにせよ、彼自身はミツバチと違い何か人間の役に立つものを生産するわけではない。またキツネに対する信仰が一般的であったわけでもない。役に立つの意味で大切にされたのは東北地方で飼われていた農耕用の牛馬であろう。しかし牛馬は人間並の扱い<sup>2)</sup>を受けたにせよ、あくまでも「畜生」であることに変わりはない。いずれにしる生物でミツバチに匹敵するほど尊崇の念を持たれたものは、私たちの周りにはないように思える。

日本には動物信仰は少ない。「畜生」の語で理解されるように人間と動物の間には明確な区別が存在した。もちろん目の前にいる牛は「輪廻」の結果として誰かの生まれ変わりかもしれない。それ故に、まだ人間として生まれていることは幸せであり、畜生道や餓鬼道に生まれることは大きな違いがあった。これに対しヨーロッパは狩猟民族であったためにトーテム信仰が行われ、古くから動物崇拝が存在していた。狩猟や牧畜を通して動物との生活がいかに密接

であったかを神話が示している。例えば北歐神話の天地創造における牛や、オーディンの乗る八本足の馬スレプニル、あるいは太陽や月を引いて昼や夜を造る牛馬などに見られるように、動物が重要な役割りを果たしている。キリスト教の普及により、動物の神性は否定され、人間以外の生物は全て人間のために存在することになったが、ゲルマンの多神教的要素が聖者崇拝に置き換えられたように、動物崇拝も容易には消えなかったであろう。現在でも狩猟家は狩猟の獲物として動物の肉そのものよりもむしろその枝角を貴重なものと考えているが、その起源をゲルマン時代の発掘品によくある祭式用の枝角付き頭飾り<sup>3)</sup>が示している。つまりこれは雄鹿の生殖力と闘争心に対する信仰に由来するのである。日本では早い時期に大型動物が狩り尽され、狩猟生活を脱せざるを得なかったので、神格化の基盤もその対象ももはや存在しなかったとすることが出来る。

人間はその歴史が始まって以来、いろいろな生物の持つ有用性に着目し、多くの植物を栽培化し、多数の動物を家畜化した。このような生物の利用は偶然に生じたのではなく、個々の生物についての詳しい知識に基づいていた。植物、例えば薬草の利用では、各植物について詳しい知識が不可欠である。ある植物が持つさまざまな特徴が前以て知られていなければ、その植物がある症状に対し一定の治療効果があると判断できないであろう。単なる試行錯誤では何千何万種にもおよぶ植物の中から効果あるものを見出だすのは不可能であったろう。動物に関しても同じことが言える。例えば先史時代の狩猟採集生活では日々の狩猟の成果が人間の生存を左右した。それ故、この時代の人間にとってはどのように確実に獲物を捕らえるかが常に緊急かつ重要な課題であった。今日なお多くの狩猟民族の間で動物を捕獲するために多種多様なワナが用いられているが、それらのワナの大部分は中石器時代にすでに発明されていたのである。このワナが発動する仕掛けには当然ながら動物の行動と習性についての深い知識が必要であった。もちろん通常の狩猟でも動物の行動についての詳しい知識が前提となっていた。動物はどの道を通って水飲み場や草地にやって来るか、どのような動きが警戒を示し、そして逃走に繋がるかについての知識が狩

獵方法に生かされ、どこでどのように動物を追うべきかが判断された。

一体このような深い知識は何に由来するのであろうか。それはなによりもまず精緻な観察の結果であった。人類は他の猿と異なり器用な手を持っていた。その手は「つかむ」「にぎる」の外に、親指が他の指と向き合うため、指先でつまむことが出来るのであった。その結果、人類は物を手に取っていじくり回し、物の性質形状を詳しく観察することが出来るようになった。また手に取ったものを、赤子がするように構わず口に入れ、その味や舌触りを調べたかもしれない。しかし、何にも増して人類の目、立体視と色彩識別の出来る目、が人類に観察を教えたのであった。森林や草原で三次元的に、また色分けして物を見ることは、また時には手に取り物の細部に亘って調べることは物の存在一つ一つを際立たせ、個別的な物の存在を、そしてその中の類縁性を同時に確信させたであろう。狩猟においても採集においてもこのような観察の結果が残りなく発揮された。観察は学問ではなく生活であった。ローレンツの動物行動学がハイイロガンの雛がどのようにして親鳥を認識するかの仕組みを明らかにする以前から、インドネシアの農村では「刷り込み」を利用したアヒルの飼育が行われていたのである。古代エジプト人が、家畜の糞を丸めて処分してしまう砂漠の清掃昆虫であるタマオシコガネを、それ以前にフェーブルと同じ目で詳しく観察することがなかったならば、球形に整えられた糞を宇宙とする発想は生まれず、この微小な昆虫を聖なるスカラベとして神格化することもなかったであろう。

有用な動物を家畜化する際にも、菓草の場合と同じように、その動物に対する詳しい観察がそれ以前に存在した。観察の結果ある動物の行動や習性そして身体構造が知悉され、その動物のどの部分が人間の生活のどの部分に役立つかが発見されたのである。人間はある動物を捕らえ、それを囲いの中に置いて家畜化したのではなく、むしろ人間が進んで群居性のある動物の群の中に身を置き、動物と行動や生活を共にすることで彼らを支配下に置く手段を知ったのであった<sup>4)</sup>。唯一の家畜化された昆虫であるミツバチの場合にも同じことが言える。蜜の採集の段階からすでにミツバチがどのような場所に営巣するかがよく

観察され、飼育の段階に入ると、観察によって得た知識に蜜の取り出しやすさを付け加えて、すぐにさまざまな形と材質を持った人工巣が登場する。観察は自分が置かれている環境の中で行われたので、人工巣も環境に応じた形態を採った。エジプトでは岩の隙間に営巣するミツバチに学び、両端がやや細い紡錘形をした土器製の筒で、それを多数重ねてミツバチを飼育したが<sup>5)</sup>、中央ヨーロッパの森林地帯では、樹木の空洞に巣を造るミツバチに倣い、立木に人工的に空洞を彫り抜く方法や丸太をくり抜く方法が採用された。ミツバチが営巣するのは岩穴や樹木の空洞に限らず、小さな出入口を備えた閉じた空間でさえあれば良いと分かると、それに適した材料が自然の中から容易に見出だされた。

人々はミツバチについて、牛や馬と同じように十分に知識を備えていた。女王蜂は働き蜂より体が一回り大きく、胴は目立って長く、翅から大きくはみ出し、手足が細く長い。雄蜂は同じように体が大きい、胴がずんぐりと丸い。ことに特徴的なのは頭部の大部分を占める大きな複眼で、これは交尾のために飛んでいる新女王を見付けるためである。しかし、ミツバチを見る人々にとって衝撃的なのは雄蜂の哀れな最期であろう。交尾の時期が終わると働き蜂たちは残った雄蜂(交尾に成功した雄はその瞬間に破裂して死ぬ)はもう必要がないと、無慈悲に寄ってたかって巣から追い出してしまふ。雄は普段は口移しに蜜を貰っていたので、自分では花の蜜を探すことすらも出来ず、餓死してしまふ。観察する者がたとえ雌雄の区別を知らなくとも、他のミツバチたちに囲まれてつまみ出される、目の大きなミツバチの存在をはっきりと意識したのであろう。意識された形態と生態の違いは言葉に定着した。女王蜂を Weisel, 雄蜂を Drohne, 一般の働き蜂を Biene<sup>6)</sup>と、全く異なった単語で分類がされた。

このようにしてある動物が家畜として身近に置かれると、観察はますます進み、その習性についての知識が増した。牛や馬などの哺乳類の家畜は人間との意志の疎通が図りやすく、また大型で観察しやすいので、これらの動物に関する知識は飼育する上で具体的に利用できるものであれば、やがて飼育方法に反映された。しかし、ミツバチの場合は異なっていた。つまり、ミツバチは昆虫であるため言葉を解せず、利用は出来ても人間の意のままにならなかった。し

## 蜜蜂と俗信

かもその行動は人間の目に触れ難く、観察し難い部分も多かった。それでも人間は身近に置かれた巣からミツバチに関する多くの知識を観察によって得たであろうが、多くの知識は恐らく昆虫という制約の故に応用を見出せなかった。しかしながら、応用を見なかった知識は現代であれば意味のない知識として顧みられなかったかもしれないが、当時の人々はそれらにも一つの応用の道を見出したのであった。それがつまり俗信である。確かに俗信の中には迷信の名に相応しい、現実とあまりにかけ離れた馬鹿げたものもあるかもしれない。俗信は一般的に因果関係の形式を採ることがその特徴であるが、この因果関係の結論部分を構成する、ともすれば非難の対象となる現実乖離という応用面ではなく、その原因の部分を見れば、そこには日々の観察から得た知識が明らかに存在する。いくつか例を挙げよう。

### 〈ミツバチは予知する〉

秋の終わりには多くの昆虫が寒さのため冬越し出来ずに来年の卵を産むと死んで行く。木々の葉も落ち、自然が活動を止め、夏の空気を騒がせた昆虫たちが死に絶えたかに見える時に、ミツバチだけは生きている。彼らは暖かい季節にせっせと集めて貯えた蜜（人間はこの貯えを横取りする）を少しずつ消費し、巣の中に密集して互いに体温を高めながら厳寒の季節を皆で生き抜いて行く。同じハチの類でもスズメバチやマルハナバチにはそれは出来ない。彼らは冬になれば死に、営々と築き上げた巣は捨てられ、女王一匹だけが残り、寒さを凌ぐ場所を見付けて冬を越す。ミツバチは明らかに他の昆虫と違い、知恵の備わった賢い昆虫と見なされる要素を持っている。人の厭うマツケムシですら雨が近づくのを知っている、利口なミツバチには天候を予知することなど簡単であろう。

ミツバチがのんびりと遅く起きて巣から飛び出して行けば、天気は安定するだろうし、妙に忙しげであれば天気が変わり、長く大騒ぎするようであれば嵐になる。秋の終わりにミツバチが巣をしっかりと塞げば当然のことながら厳しい冬が待ち構えている。その逆は過ごしやすい冬となる。ミツバチの分封が5

## 野 島

月にあれば暖かな天気で草の伸びも良く、干し草も荷車一台分よけいに刈れる<sup>7)</sup>。しかし分封が6月下旬に延びれば天気は悪く、干し草の収穫も思わしくない。

天候ばかりではない。彼らは災害や家庭の不幸まで予知出来る。ミツバチが巣から逃げ出したり、高く舞い上がったり、妙な場所に多数集まったり、いつもと違う異常な行動をとれば、あるいは突然に多数が死んだりすれば、山崩れや洪水などの自然災害や疫病が起こるかもしれない。巣箱の中のミツバチが落ち着かず、羽音もいつもと違ってうるさい。これは慕っている飼い主の身に何か不幸が起こるのかもしれない。飼い主が死ぬ時にはミツバチは窓に集まって別れを告げるほどなのだから。

### 〈分封は生命の誕生〉

ミツバチの増殖に必要な分封は晩春から初夏にかけて行われる。分封は牛や豚で言えば子を産むことと同じで、財産の増加を意味する。従って、その成り行きは重大な関心事である。見慣れた風物とは言え、何千匹ものミツバチが密集して蜂群 (Schwarm) を形成し、狂おしく乱舞 (schwärmen) し、近くの木や枝などに取り付いて蠢めく蜂球となるのを見るのは、ドロドロした生命そのものを見るようで不気味である。しかも、その生命の黒茶の塊が火の玉のように飛び移って行く。これは場合によっては不幸の知らせである。蜂群が家の軒下に付けば火事になるし、他家の蜂群が飛んで来て庭の枯枝に付くとその家に死人が出る。自家の蜂群がいずこにか飛び去り三日戻って来なければ、それは蜂蜜を産む財産の喪失ばかりでなく、もっと大きな喪失に繋がる。つまりその家の跡継ぎ (=分封) となる子供が死ぬかもしれない。

### 〈ミツバチは言葉を理解する〉

一匹のミツバチが刺すと、声でも聞いたかのように近くにいるミツバチたちが刺された相手を目指して襲いかかって来る。最初のミツバチが助けを求めて叫んだに違いない<sup>8)</sup>。また、一匹が蜜の豊富にある場所を見付けると、皆がそ

## 蜜蜂と俗信

こを目指して飛び立って行く。彼らは人間には聞こえないが言葉を使っているに違いない。von Frisch がミツバチのダンスの解明でノーベル賞を受賞する以前から、人々はミツバチの会話の可能性に気付いていた。そうでなければどうして花の豊富な場所に巣箱を運ぶ転地養蜂が出来ようか。発見者の誰かが、花のたくさん咲いていることを、巣に帰って仲間たちに告げるに違いない。もしかすると彼らは人間の言葉も分かる。なぜならミツバチの前で粗野な言葉使いをするときまって刺されるからだ。

ミツバチの飼い主である夫を亡くした未亡人は、巣小屋に入る時には必ず「夫も側にいるよ」とミツバチたちに向かって言ってから入った。そうしないと女の不浄さを嫌うミツバチに刺された。言葉が分かるのであるからミツバチに対して挨拶をし、クリスマスや新年あるいはミツバチに縁の深いロウソク祭り (Lichtmeß) の日が来たらミツバチに知らせるのも当然であった。例えばロウソク祭にはバーデン地方では巣箱を叩いて “*Bienlein, Bienlein, freudet euch, Lichtmeß ist da!*” と告げた。この三祭日に限らず全ての祭日を告げる地方もあった。祭日のみならず家庭内の出来事を何でも報告する所もあった。結婚を告知して巣箱を赤い布で飾り、花嫁を紹介し、子供の誕生もまた知らされた。もちろん飼い主の死、あるいは家人の死も告知しなければならなかった。これを告げる時には、地方によって異なるが、巣を三度叩いたり、動かしたり、ゆすったり、出入り孔を吹いたりしてから、決まりの言葉を唱えた。告知を怠ると後でミツバチが死んだり、群に害があったりした。跡継ぎの新しい飼い主が決まればそれを紹介した。ミツバチには死の影が差してはならなかった。家に死者が出た時には巣を家から出したり、別の場所に移したり、それが出来ない時にはせめて少し持ち上げる。そうしないと蜜が採れなくなる。あるいは悪いことが起こる。葬儀の列が家の前を通る時には、巣箱を廻して逆向きにした。

### 〈ミツバチは勤勉〉

ミツバチはまるで働くために生まれて来たかのように良く働く。働いている

様子を観察してプリニウスがすでに驚嘆している<sup>9)</sup>。ミツバチは怠けることを知らない。樹木の甘露生産量はもちろんそこに寄生するアブラムシやカイガラムシの個体数の増減に左右される。モミにのみ着生するモミミドリアブラムシの個体数は4～6年の周期で極大極小を繰り返す、モミの甘露生産量もそれに応じて変化する。その極大期の年に当たると甘露が多過ぎるほど出来、しかもその期間が長いので、森の養蜂家は普段より早めに採蜜を切り上げ、ミツバチが働き過ぎて死なないうよう、モミの森から転出しなければならない<sup>10)</sup>。また人々は、ミツバチはシロツメクサ (Weißklee) の蜜はあんなにも熱心に吸うのに、色の違いだけで同じ種類のアカツメクサ (Rotklee) にはなぜ見向きもしないのだろう、と不思議がり、その理由として、ミツバチは働くことが好きで安息日である日曜日にも働いたため、神が怒り、甘いアカツメクサの蜜を吸うことを禁じた<sup>11)</sup> からだ、と思った。(実際にはアカツメクサの花が細く長いいためミツバチの口吻が蜜にまで届かない。) 神が罰を与えるほど働き者なのだ。従ってミツバチは遊び人を嫌う。彼らには善人と悪人の区別が出来る。軽薄な女や飲んべえは刺されやすいし、化粧した女や娼婦は嫌われる。ミツバチの前で喧嘩をしたり罵ったりすれば刺される。夫婦仲良く仕事に精を出せば良いものを、喧嘩ばかりしている不和の家はミツバチも嫌って逃げて行く。

#### 〈ミツバチは清潔好き〉

ローマの文人たちはエジプトで信じられていたミツバチの腐肉発生説をそのまま取り入れた。例えばウェリギリウスはその著書『農業誌』でそれを説き、プリニウスもミツバチの腐肉からの復活を『博物誌』に記していた。これが後世にラテン語の授業を通してインテリたちの間に伝えられ、この腐肉発生説は根強く残り、結局1668年にイタリア人の Francesco Redi が実験で否定するまで続いたのである。しかし、そんな説を信じたのは生きたミツバチを知らないインテリだけであつたらう。ミツバチが清潔好きなのは誰もが知っていた。時間があれば彼らは身繕いに余念がないし、大切な翅をいつもきれいに磨く。ミツバチは腐肉や家畜の糞には決して近寄らない。他の蜂類と違いミツバチは



自分の糞も巣の中でしない、巣の外で用を足すのである。分業体制の整った組織としてもミツバチは清潔を心掛けている。清掃係がきちんと決められている。サナギから出て来たばかりの若いミツバチはまだ蜜集めに出ない。彼らに与えられる最初の仕事は巣内の清掃である。それ故、ミツバチは不潔なものや悪臭を嫌う。生理中の女は不浄<sup>12)</sup>であり、もし彼女が巣に近付けばミツバチが死ぬと思われた。従ってミツバチの世話をするのは男であった。と言っても、汗の臭いやニンニクの臭いをさせて巣箱に近付けば同じことであった。

〈ミツバチは処女懐胎〉

人々はミツバチを観察しながらその繁殖方法を不思議に思った。スズメバチや他の蜂類は交尾するのが見られるのに、「彼らの(=ミツバチ)の間での交尾がいまだかつて観察されたことがない」(プリニウス)。実際ミツバチは十数メートルの上空で交尾し、人目に付かない。女王蜂は一度の飛行で数匹の雄と交尾し精子を貯える。貯えられた精子は女王の貯蔵囊の中で、雄蜂自身が数週間しか生きないのに、数年間も生き続ける。排卵のたびに卵は精子に接触して受精する。女王蜂はこのように一度の交尾飛行だけで卵を産み続けることが出来る。ミツバチの生活についての研究が飛躍的に発展したのは、現在見られる形の巣箱の発明、ガラスの巣箱による観察、顕微鏡による解剖学的研究などの技術的進歩があった19世紀に入ってからのことである。交尾の詳しい状況が本当に明らかになったのはつい最近のことで、気球を使って女王蜂を追跡するという画期的な調査が行われてからである。それまでは学者も庶民も女王蜂は雄で君主であり、働き蜂が卵を生むと思っていた。それ故、ミツバチの処女性の話は長い間打ち破られなかった。ミラノ司教の聖アンブロシウス(339—397)がすでにキリストは「ミツバチのように処女懐胎で生まれた」と言っている。人々はミツバチの処女性を信じ、マリアの処女懐胎の証明をこの小さな昆虫に見出した<sup>13)</sup>。自らが純潔であるミツバチはある人間が純潔か否か区別できた。純潔な少女は刺れないし、蜂群を捕らえるときに純潔な人が側にいるとうまく行ったのである。また少女は自分が好きな男を蜂群の近くに立たせ、ミツバチ

が刺すか否かで、その男が童貞か否かを調べることが出来た。

〈ミツバチは特別な存在〉

このようにミツバチは単なる昆虫の地位を越えていた。それどころかプリニウスは人間よりも優れていると見なした。「合理性という点でどんな人間をこれらの昆虫と並べることができるか、とわたしは言いたい。これらの昆虫は、彼らが共通の利益のみを念頭におくという、この点において疑いもなく人類にたち勝っている」<sup>14)</sup>。このように優れた動物であるため、ミツバチを造ったのはイエス自らであると信じている地域もあった。イエスが木片を籠（＝ナワ編みの巣箱）に投げ入れると、あるいはウジを樹木の洞に入れると、ミツバチが生まれたのである。人々はこの利口なミツバチを虫ではなく鳥だと思い、神の小鳥、マリアの小鳥と呼び畏敬の念を以て扱った。この気高いミツバチを打ったり、ましてや殺してはならなかった。ミツバチは普通の動物ではないので、動物用語を用いず、sterben, essen, trinken と人間なみの表現で遇せられた。従って、ミツバチを贈り物として、つまりただで貰うのはミツバチに対して失礼である。そんなミツバチは栄えない。否、逆に売買こそ失礼になる、そんなことはすべきではない。ミツバチは相続か贈与が良い。いずれにしる売買の際にまるで牛や馬の売り買いのように、だましたり、値切ったりしてはならない。

以上のように、俗信にその起源と考えられる観察を対応させると、俗信には日常行われた精緻な観察に基づく知識がその前提に存在していることがよく分かる。しかし、ミツバチの俗信には必ずしも単なる観察だけでは説明し切れない部分も多い。ミツバチに対して必要以上に（と私には思えるのだが）関心が集まり過ぎている。それは聖なるスカラベの場合と同じように、まずミツバチの行動に対する驚嘆に由来している。女王を中心とする整った組織、共通の利益に対する奉仕、分業体制、精巧な巣、そして勤勉、この小さな体の中にプリニウスの言うように人間に優る点が何と多数あることか。この驚嘆に加え、そ

## 蜜蜂と俗信

の生産物である蜂蜜やロウがやはり当時の世界にあっては驚嘆に値するほど貴重<sup>15)</sup>であったが故に、それを産み出すミツバチにも多く関心が寄せられ、一段と観察の対象となり、また飼養によりその巣箱が人間の近くに置かれることでさらに観察が進んだ。

ミツバチに対する関心はまず蜂蜜の神聖視に始まったように思える。旧約聖書の有名な言葉「乳と蜜の流れる地」に代表されるように、聖書と蜜との関係は深いように見える。聖書で言う蜜は果汁を意味することもあり、必ずしも蜂蜜に限らないが、いずれにしても滋養ある食物を意味している。意外にもモーゼはこれを神に捧げる犠牲から除外している（レビ記 2, 11）<sup>16)</sup>。しかし、早くからキリスト教化された北アフリカでは異教時代から宗教行事における蜂蜜の役割は高く、改宗後も洗礼の後に牛乳と蜂蜜が受洗者に供された。当時の教会指導者はモーゼが命じた禁止に対する違反に苦慮し、その地域の指導者を集めて何度か教会会議を開き、洗礼式での蜂蜜の使用を禁じた。彼らの決定の根拠は、モーゼが蜂蜜を神の犠牲とすることを禁じたのは、彼がミツバチが糞から生まれる汚れた存在であると知っていたからであり、従って聖書は蜂蜜を〈汚れたもの〉と認めている、というのであった。また糞ではないが、サムソンが打ち殺した獅子の死骸にはミツバチが群がり、そこには蜜があった、と先ほど述べた腐肉発生説を認める記述が旧約聖書にある（士師記 14, 8）。しかし、キリストが復活の後に使徒たちと共に魚と蜜を食し（ルカの福音書 24, 42）、洗礼者ヨハネはイナゴと野の蜂蜜を食べた（マタイの福音書 3, 4）と記されているように、新約聖書が蜂蜜を神聖な食べ物と認めていることに初期のキリスト教信者たちは共感し、彼らにとっては蜂蜜の使用こそがユダヤ教からキリスト教を分離させる大きな意志と考えられた。

糞からか、腐肉からか、ミツバチの発生は古くから大きな謎であった。古代エジプトにおいてはミツバチがまるでハエのように牛の糞から、あるいは牛の死骸から生まれると信じられていた。これはハエのウジとハチの幼虫の姿が少し似ていることから生じたのかもしれない。また、神聖な昆虫スカラベ（幼虫

はやはりウジ状)が糞球の中から生まれて来ることからの連想かもしれない。エジプト神話で牛の姿をした豊饒神 Apis は自らが死ぬことで万物に(もちろんミツバチにも)生まれ変わるが、この神を地上で体現する聖牛は蜂蜜の菓子で育てられ、ここにも蜂蜜の神聖性が窺える。また、ミツバチを意味するラテン語 apis がこのエジプトの神の名と同じことからローマ時代にミツバチと牛との連想関係が広まったとも言われている。アリストテレスはミツバチの生殖を単性生殖としたが、必ずしも納得してはいないらしく、異説として、交尾ありとする説や、ウジ形の幼虫の起源については蜜を集めるのと同じように花から幼虫を運んで来るといふ説を挙げている<sup>17)</sup>。

北欧神話でも蜂蜜は神聖である。それは世界樹ユグドラシルから流れ落ちる。この大樹には数本の深い根があり、その一本の根は神の国アスガルドに達し、そこに聖なる泉がある。その岸边には過去・現在・未来をつかさどる三人の女神ノルンたちが住む。彼女たちは毎日この泉の水と泥をユグドラシルの幹にかけ、樹が枯れないようにしている。この水と泥とがこぼれて人間の住む下界に降ると蜂蜜になる。ギリシア神話でも蜂蜜は神の飲物として登場する。蜂蜜は古代の人々の生活に極めて重要であった。それはまず甘味料であった。これ以外に甘味が存在しない時代にあっては蜂蜜の甘さは言いようもないものであった。インドの説話では、獅子に追われた青年が断崖から落ち、辛くも突き出した木の枝につかまり、九死に一生を得たが、断崖の上には獅子が見張り、下の川には怪獣が口を開けて落ちるのを待ち、木の根元にはネズミがいて木を少しずつかじっている。恐怖してふと見上げると枝の間から蜂蜜が流れている。青年はこの蜂蜜を嘗めているうちに、自分の身の危険をすっかり忘れてしまったのである。この説話では蜂蜜の甘さを現世の甘美な悦楽、あるいは浮世そのものに喩えている。またギリシア神話では蜜を嘗めようとしてミツバチに刺されたキューピットが、ミツバチは小さいくせに邪悪だとヴィーナスに訴える。ヴィーナスは応えて言う、ミツバチが甘美さと痛みを与える点でキューピットと同じだと。ここでは蜜は恋の甘さに喩えられている。

しかし、蜂蜜の重要さは甘味だけではない。そこから得るアルコール(蜂蜜

酒) が人間を神の位置に近付ける陶醉をもたらすのであった。スラブ人やゲルマン人の居住する地域は寒さのため葡萄酒の原料となるブドウの栽培に適さず、また森林や湿地の多い土地なのでビールの素になる麦や小麦を栽培する場所も限られていた<sup>18)</sup>。それ故、アルコールの原料となる糖分を持つ食品として蜂蜜の価値は高かった。北欧神話では蜂蜜酒は聖なる飲物である。ユグドラシルの第二の根は霜の巨人国に伸び、その根が尽きるところにも聖なる泉があり、無限の知恵を蔵する蜂蜜酒が湧いている。泉を守るのは巨人ミーミルで、彼は毎朝その酒を飲んで知恵と予言する力を得ている。北欧神話の主神オーディンは常に片目の姿で描かれているが、それはかつて彼が知恵を得たいために、この蜂蜜酒を一杯飲ませてもらう代償として自分の片目を巨人に与えてしまったからである。またオーディンは巨人スットングが隠し持つ詩作の才を与える蜂蜜酒を、蛇に身を変えて盗み出し、今度は驚に姿を変えて神の国アスガルドに持ち帰る。以後、オーディンの恩寵を得て詩の酒を飲んだ者のみが真の詩人になれた(オーディンが甕に蜂蜜酒を吐き出す際に数滴が外にこぼれ、地上に降る。これを人間たちが飲むと三流詩人になる)。

マリア崇拝と結び付いたミツバチの純潔は、その生産物のロウにも及んだ。ミツバチがマリアであるなら、そこから生まれたロウソクはイエスであった。ロウソクの光は同時に世界を照らすイエスでもあった。それ故、教会で大量に用いられるロウソクは獣脂からなどではなく、汚れないミツバチのロウから造られたものでなければならなかった。教会では2月2日のロウソク祭(Lichtmeß)に教会および各家庭でその一年に使われるロウソクを聖別し、聖なる光が限なく行き渡るようにした。またこの機会にロウソクの素材であるロウも聖別され様々な用途に用いられた。人々は新年にロウを水にたらし、出来た形で将来を占い、キリスト生誕の家畜小屋の場面をロウ細工で再現してクリスマス前の待降節に飾り、体に悪いところがあればその模型をロウで作って教会に納めた。聖別されたロウは魔除けの力があり、修道院はお守りのブローチをロウで作った。魔女による害が人々を恐怖させた時代にあっては、ロウ製の十字架と聖別

された水と呪文とが魔女の術を逃れる道具であった。魔女は物にも魔法を掛け、ニセ物を真と偽ることが出来たので、油断は禁物だった。人々は例えば三位一体の日（聖霊降臨祭後の日曜日）に聖別されたロウをバターに一滴たらし<sup>19)</sup>、魔女の作ったバターを見抜いた。寝室に、あるいは妊婦の部屋に魔女や悪霊が入り込み、人々を苦しめた。それを防ぐために鍵穴にロウを詰めたり、鍵を差し込んだままにして塞ぎ、祈禱書や聖書を鍵穴の前に置いた。魔女発見の手引きとして悪名を馳せた Hexenhammer によると、異端審問官たちは魔女とされた女たちの口を割らせるために、まず魔力が宿るとされた髪の毛を剃り、聖別されたロウを一滴落した聖水を、食事と水を与えられなかった女たちに飲ませた。聖なる飲物を飲ませることで彼女たちは容易に自分が魔女であることを認め、その悪行の数々をすぐにも白状するはずであった<sup>20)</sup>。魔女の害を受けないようにするには聖水を部屋に振り撒くことが大事であったが、やむ得なければ聖別ロウソクでも十分であった。聖なるロウソクから出る光は部屋を隅々まで照らし、聖水を撒くことと同じ効果を期待できた。

ところで蜂蜜が、上で述べたように、それが含む豊富な滋養とそこから醸す蜂蜜酒により、古くから聖性を得ていたのに対し、ロウは教会がミツバチにマリア的処女性を認めたことによって神聖視された。つまり、蜂蜜が自己の持つ本来の価値によって神聖視されたのに対し、ロウはキリスト教の裏付けによって神聖視されたのである。ロウは教会の中で水・塩・ネコヤナギの枝 (Palm-busch. 復活祭用) と並んで聖別を受けて自然物以上の価値を持ち、特別の扱いを受けた。それに対し蜂蜜はその聖性がキリスト教とは無縁なところにあつたので、キリスト教からはむしろ意識的に無視された。そのことを中世に作られたミツバチを呼ぶ呪文 (Bienensegen) が証明している。中世の修道院は森林を開墾して農業を営むばかりでなく、ブドウを栽培してブドウ酒を醸造し、麦からビールを作るなど、当時の先進的な産業を担っていた。もちろん修道士たちは養蜂も経営した。彼らは分封するミツバチが遠くに逃げ出したり、手の届かないような高い所に移動しないよう、あるいはよく働いてくれるよう呪文を唱えた。修道士たちが唱えたラテン語の呪文は9世紀に遡ることが出来る。

## 蜜蜂と俗信

ドイツ語の呪文としては古高ドイツ語の貴重な資料となるロルシュの蜜蜂呪文 (Lorscher Bienensegen) は10世紀に成立した<sup>21)</sup>。このような呪文は後世の農民の口にも生き続け、前世紀にそれが民俗学研究の資料として書き留められた。この近世の呪文には「蜂蜜」の語が登場している<sup>22)</sup>が、15世紀以前の古い呪文は「蜂蜜」には触れず、もっぱらロウをもたらしものとしてのミツバチが対象となっている。これは当時の習慣を無視した行ないであった。なぜなら、新年やクリスマスや聖木曜日 (復活祭直前の木曜日)、あるいは春や収穫祭に蜂蜜が祝いの食物として扱われていたからである。これらは蜂蜜に対する古来の豊饒信仰で、ゲルマン文化やギリシア・ローマ文化に起源を持つと現在では考えられている。こうした異教起源と、かつての洗礼での蜂蜜使用を庶民に想起させないために修道士たちは敢えて蜂蜜を無視したのであった。

しかしその一方で、蜂蜜が逆にキリスト教の中に生き続けた例も存在する。ギリシア人は蜂蜜の甘美さを詩に喩え、ミツバチを〈ミューズの小鳥〉と呼んだ。伝説では幼いプラトンの口にミツバチが集まり蜜を塗り、後のプラトンの雄弁を予告した。このように、蜂蜜は〈甘い=耳に快い〉の意から〈蜂蜜のような言葉〉という形で雄弁の比喩として使われ、キリストの教えを耳に快く説く雄弁な説教師たちの弁舌の代名詞となった。さらに学者の弛まざる精進の姿がミツバチの勤勉さと重なった。例えば先ほどのミラノ司教聖アンブロシウスは学者としてまた司教として多大な功績を残したが、伝説によれば彼が幼児の時にもミツバチが彼を刺すことなく口の中に入りし、蜜を置いて行ったと言われる。これはプラトンの時と同じように彼の流れるような雄弁と孜孜とした学問的努力とをミツバチで喩えたのであるが、後に彼の姿はミツバチの巣を持った姿で図像化された。彼の伝説と巣を持った姿の故に、アンブロシウスはさらにはミツバチを飼う人々の守護聖人となった。

蜂蜜はこれ以外にもキリスト教の教父神学や神秘主義の中でいろいろな比喩に用いられた。例えばキリストの体は蜂蜜を滴り出させる岩であり、神の言葉は新たな楽園の蜂蜜の流れであり、汚れない姿で蜂蜜の中に生きているミツバチは神の恩寵の中に生きている純な魂であり、また教会という巣箱の中で信者

たちはキリストの甘い蜂蜜をすする。しかし、このような比喩は、ロウの場合と異なり、もっぱらキリスト教学者に代表される知識階級の間でのみ受け入れられる非常に高踏的な比喩であった。なぜなら、蜂蜜は同じミツバチから得られるのに、ロウのようなキリスト教を補助する一般性を獲得できず、神学の支持を得ても決して庶民が持つ魔除けにはなり得なかったからである。キリスト教的解釈にも拘わらず人々は相変わらず蜂蜜の甘味の中に異教を味わい、もっぱら一種の万能薬として、古くから存在する薬草などと同じ効能をその中に認めていた。考えてみれば、人間はおそらく人類誕生以前から蜂蜜を知っている。いわば蜂蜜使用の歴史は人間と同じくらい古い。それに比べればロウはずっと若く、灯火として人間の役に立つようになったのはローマ時代になってからである。若いロウに新しい意味を盛り込むことは、その普及に合わせれば良く、極めて簡単であった。しかし、蜂蜜には何万年にも亘る歴史の中ですでに意味が与えられてしまっていた。それでもなおキリスト教神学が蜂蜜を使おうとしたのは、唯一の甘味料が持つ普遍的な魅力を安易に捨て去ることが出来なかったことと、在来の異教信仰を巧みに採用して行くキリスト教の伝道方法によるのかも知れない。

人々は事ある毎にミツバチを観察し、ミツバチの一挙一投足にも注意を配り、ミツバチのちょっとした変化にも気づいていた。このような観察から生まれる限り、俗信には十分な根拠があった。しかし、この観察する目にキリスト教が介在することで逸脱が始まった。ミツバチの処女性には、間違っているにせよ、まだ観察による確実な根拠がある。しかし、それを理由にしたその生産物のロウの聖性となると、ただ〈汚れないもの〉が産み出したからという、もはや観察に基づかない虚構でしかない。さらに、そのロウがミツバチというマリアから生まれたキリストに等しいが故に、悪魔に対抗する能力を持つと信ずることは、科学的な思考の基盤を奪うことになったであろう（もちろん、ここで言う科学的思考とは、「非科学的」な錬金術が近代の化学の発展の準備を果したという意味での「科学的」思考であるが）。その点では、人を呪うために



## 蜜蜂と俗信

ロウで人形を作り、心臓の辺りにトゲスモモのトゲを刺し、それを相手が通る敷居の下に埋めておく<sup>23)</sup>ことの方が、科学的であったと言えるかもしれない。なぜなら、この場合にはロウの柔軟性という性質（つまり、これも観察の結果である）を利用し、相手の姿形に似たものを作ることが出来るだけに、それを見た者にはいわゆる共感呪術<sup>24)</sup>としての効果が発揮されたであろうから。

日本人はミツバチに関する俗信をほとんど知らないが、それは人々が観察しなかったからではなく、ミツバチと生活を共にする機会がなかったからに過ぎない。観察は常に、そして至るところで行われている。天候が一日の作業を左右し、一年の豊凶を決めたので、農民には天候が最も関心の的であった。俗信には天候に関するものが非常に多くを占める。「夕焼は晴、朝焼けは雨」「ツバメが高く飛べば晴、低く飛べば雨」などを見れば、とりわけ天候の俗信が日々の観察の集大成であることがよく理解できる。そして、このような天候俗信を知った人々は、今度は天候俗信の枠組みの中で夕焼を見、ツバメを見ることを覚え、天候を知る。つまり、俗信は観察によって生み出されるばかりでなく、逆にまた観察を生み出している。俗信の表示する因果関係は別として、俗信が存在すること自体は非科学的ではなく、むしろそこには前提として精緻な観察が、従って科学的な態度が存在する。そして俗信を知ることがさらに観察を惹起する。もちろんこれは俗信のみに限らない。自然界をひとたび意味の連関の網の目に捕らえてしまうと、次には意味が自然界を意識の中に呼び込む。例えば、ギリシアの牧人たちは羊を追い終えた野営地で、つねに満天の星を眺めていた。やがて、星の群の中に神々の姿が浮かび上がり、今まで互いに無関係に輝いていた星たちが急に離れ難く結び合い、星座に展開する。ひとたび星座が成立してしまうと星座が星の夜を占め、私たちは星を星座の中に見出す。

現代では俗信が追放され、明日の天気を天気予報で知り、自分の目で風向きや雲の動きを見るということは全く忘れられている。このような時代には、例えばバードウォッチングのように、観察を意図的に行わないかぎり、観察は存在しない。キリスト教が観察を離れミツバチの純潔さによるロウの聖性を信じ

込ませたように、現代技術に対する信仰が私たちから観察する力を奪っているのかもしれない。俗信が生まれたことは、人間がそれだけ多く自然に接し、自然に親しい位置にいたことを意味している。その意味で私たちは俗信を持つ時代に比べ自然から一步退いていると言える。

注

- 1) 俗信という語はあまり聞き慣れないが、Aberglaube の訳語である。Aberglaube は普通「迷信」と訳される。しかし、広辞苑が「俗信」の項で「民衆の間で行われる宗教的な慣行・風習，呪術・うらない・まじない，幽霊・妖怪の観念など。このうち，実際に社会に対して害毒を及ぼすものを迷信と違って区別する場合がある」と言っているように「迷信」にはどうしても〈世を惑わせる〉という負のイメージが付きまとっている。「俗信」は「俗間信仰」がつづまったものらしい。「俗信」「迷信」以外に，似たような内容を持つ語として「言い習わし」「民間知識」「民間信仰」などがある。『日本俗信事典』の鈴木氏の解説によれば，柳田邦男は俗信を「～したら～する」（食べてすぐ横になると牛になる＝横になるな）という禁忌と考えていた。しかし，彼は俗信を集めて『郷土研究』に掲載する際には「言い習わし」の語を用い，つまり，俗信＝禁忌＝言い習わしと考えていた。鈴木氏は各語の差異は不明確としながらも結論的に，俗信とは「前代人が持っていた一行知識」であるとしている。例えば「イボ取り地蔵」は明らかに民衆の信仰であって一行知識でない。それ故，民間信仰には含まれるが「俗信」からは除外される。ドイツ語でも語の微妙な差異に関して似たような問題がある。Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens (以下 HWA と略す) も Aberglaube と Volksglaube を比較し，前者の持つ否定的側面を考えると，内容的にはこの事典の題名としては後者の方が適切であるが，Volksglaube とすると各民族の宗教に関する書と誤解される恐れがあるので，Aberglaube を用いたとある。従って，Aberglaube を出来るかぎり広く解釈し，祭事や慣習，民間療法的知識，Aberglaube 的な見方を物語の形式で表現している伝説等を含めたと言っている。
- 2) 木曾では馬は家畜ではなく，家族の一員として取り扱われていた。開田村では仔馬が生まれると近所の人たちに酒を振舞い，子供たちには煎り大豆を配った。また，観音さまの縁日の日に仔馬を連れて参拝し，息災を祈った。岩手県安家では特別な味噌をわざわざ仕込んで普段牛に与え，放牧中には「牛の御機嫌うかがい」と称して，月に数度牛に味噌汁を飲ませ，牛の様子を知るため放牧場を訪れた。  
市川， p. 61, 134.
- 3) 最近アカシカの枝角の付いた頭飾りが褐炭露天掘地区の Garzweiler で発見された。

## 蜜蜂と俗信

考古学者の説明によるとこの遺跡は BC. 8000 年頃の狩猟民の居住跡で、枝角つき頭飾りは、南仏やスペインの洞窟壁画に見られるように、シャーマンが獲物の豊かさを祈願して、これを被り、毛皮を着て踊る際に使用したものである。FAZ. 88. 2. 16.

4) 梅棹, p. 35.

5) アフリカのサバンナ地帯で現在でも行われている方法では、この筒型容器を木をくり抜いたり、樹皮を丸めたり、あるいは牛の角から作り、それを大きな樹木の枝から水平に多数ぶら下げる。その様子はちょうどヘチマがたくさん横に実ったように見える。この場合には樹木に巣を作るミツバチの性質を利用したものである。筒型容器はアフリカのものと古代エジプトの物と素材は異なっているが形がよく似ているので、どちらが起源か不明だが、受容関係があるであろう。(出典不明)

6) Kluge の Etymologisches Wörterbuch によれば、Grimm は Biene の本来の意味は働き蜂であると言っている。

7) Ein Bienenschwarm im Mai / ist wert ein Fuder Heu. 農民の言い伝え (Bauernregel) には養蜂に関するものも多い。例えば、

Wenn im Mai die Bienen schwärmen, soll man vor Freude lärmern.

Schönes Wetter zu Fronleichnam — reiche Honigernte.

Wollen die Bienen am Morgen nicht auf die Flucht,

sitzt sicher ein schweres Wetter in der Luft.

Mache Bienen arg' Gesumm, schlägt gar bald das Wetter um.

Töten die Bienen ihre Drohnen bald, gibt es einen schlechten Nachsommer.

8) ミツバチの毒針には細かい毛があり、針は刺した後で相手の体に引っ掛かって残る仕組みになっている。しかし、毒針は内臓と繋がっているため、ミツバチの場合には他の蜂類と違い、刺せば内臓まで出てしまい、死ぬ。この内臓が飛び出す際に、一緒に化学物質が放散し、それに誘引されて他のミツバチが集まる。松浦, p. 235.

9) 「彼らはみんな一隊となって飛び去る……その一隊が仕事に出てしまうと、あるものは蜜を足にかかえて、他のものは水を口にくわえて、また落ちそうになるまで雫をからだ中にくっつけて帰ってくる。彼らのうち若いものが仕事に出て行って、うえに述べたようなものを集めている間に、老いたものはうちで働いている。前肢で蜜を集めているものたちはそれを自分の腿にくっつける。腿はこの目的に適うようにうろこで被われている。そして口で自分の前肢にくっつける。そして十分くっつけたところで、荷物でふくらんで帰る。おのおのが三匹あるいは四匹の他のものに迎えられ、それらが彼の荷を下ろしてやる。」プリニウス p. 482.

10) Herold / Weiß. S. 223.

11) HWA. <Biene> の項。

12) この俗信はかなり古いらしい。すでにプリニウスが、蜂蜜採取の方法について述べ

## 野 島

る中で、清潔についても触れ、「蜜をとる前にはからだを清めなければならないというのがもっとも大事な掟の一つだ。またハチはふけやあかを嫌うし、婦人の月経を嫌う」と言っている。プリニウス p. 486.

- 13) エクススルテットと呼ばれる復活祭の詠誦歌の初期テキストには、蜜蜂の処女性の讚美が含まれている。「……おお、まことの至福に満ちた、奇跡の蜜蜂よ。蜜蜂の性は男性的なるものに疵つけられることなく、抱卵に煩わされることなく、その無疵が子供たちによって奪い去られることもない。そのように聖なるマリアも、処女として受胎し、処女として生み、永遠に処女でありつづけた。』『聖書象徴事典』〈蜜蜂〉の項。
- 14) プリニウスはミツバチについての章の冒頭で、ミツバチを全ての昆虫のうちで首位に置き、さらに習性の点で他のすべての動物よりも優れていると言い、最後に人間とすら比較しているのである。p. 480.
- 15) 後述するロウソクの原料として以外にもロウは有用な素材であった。例えば、ロウは薄型で精巧な装身具を鑄造するのにも必要であった。厚手のものを作るには彫った型に直接に金属を流し込めば良かった。この場合にはいくつでも同じ製品が作れ、大量生産が可能であった。薄型で細いもの場合にはロウが重要な役割りを果たした。まずロウで原型を作り、まわりを粘土で包んで焼く。焼き上がったら粘土に開けた孔から溶けたロウを流し出す。次に溶かした青銅や真鍮を出来上がった粘土の型の中に流し込む。冷めたら粘土を壊して金属を取り出すと、原形と同じ精巧な製品が現われる。これは失蠟法と呼ばれ、古代エジプト時代から知られ、19世紀まで用いられた鑄造法であった。この方法では型が失われ、同じ製品を作ることは難しい。川田, p. 125; Döbler. p. 85.  
さらにロウは板状に延ばして記録用のノートとして、壺や容器の密閉用の封印として、あるいは機密保護の封蠟として用いられた。中世、ロウは金・鉄・皮と並んで価値の高い素材であった。ロウ職人は身分の高い職人で帯剣を許された。Weber. S. 177.
- 16) 『旧約聖書略解』によれば、「蜜」が果汁を意味する可能性があることを指摘した上で、モーゼが犠牲とすることを禁じたのは「蜜」が腐敗しやすかったからであるとしている。しかし、この「蜜」が蜂蜜を意味するのであれば、話は逆で、蜂蜜はむしろ腐敗し難く防腐剤としても使われた。アレキサンダー大王の遺骸は腐敗防止のため蜂蜜に漬けられて故郷に運ばれたと言う。後述の、教会会議がミツバチの「糞発生説」を採用したのは、防腐性の問題を避けるためであったのかもしれない。
- 17) 「ミツバチの生殖発生には大きな疑問がある。現に或る魚類においても交尾せず子を産むといったような、種の生殖法がある以上、ミツバチにおいても、いろいろな現象から判断すると、これと同じことが起こるらしいのである」『動物発生論』  
「ミツバチの発生については、皆が皆同じ見解ではない。すなわち或る人々は『ミツ

## 蜜蜂と俗信

バチは子を産むことも、交尾することもなく、子を運んでくるのだ』といい、また『運んでくる』にしても或る人々は『カリュントロンの花から』、また或る人々は『アシの花から』といい、さらに他の人々は『オリーブの花から』といい、しかも『その証拠はオリーブの実のできるときに最も多くの蜂群が出て行くことだ』という。『動物誌』 p. 163.

- 18) ビールは古代エジプトですでに知られており、ヨーロッパでは紀元前7世紀にトラキアで飲まれていた。ローマやギリシアではビールは知られていなかったが、ローマの属州の一部にはビールがあった。ただしホップで味付けする現在とは違い、例えばガリアではナナカマドの実の汁と蜂蜜を入れ、甘くして飲んだ。ゲルマン人の居住地でも小麦や大麦の栽培できる地域ではビールが作られた。タキトゥスの『ゲルマニア』にその記載がある(23章)。北欧神話ではトール神が巨人国からビール醸造のために鍋を盗み出す。なお、タキトゥスも「彼ら(=ゲルマン人)は渴き(=飲酒)に対してこの節制がない。」(同)と言っているように、ゲルマン人の徹底した酒宴(Trinkgelage)は有名であるが、これは彼らの飲酒癖と言うよりは、当時のアルコールは日持ちが悪く、作ったら全部飲んでしまわなければならなかったことによるらしい。Döbler. p. 271.
- 19) 三位一体の日に聖別されたロウを魔女の作ったと見られるバターに一滴落とすと、バターは馬糞牛糞に変わる。HWA. <Butter> の項。
- 20) Hexenhammer. 第3部 p. 96.
- 21) Lerner の現代ドイツ語訳では  
Christ, die Immen sind außen! / Nun fliegt mein Getier,  
Friedlich fromm in Gottes Hut, / daß ihr heimkommet gut.  
Sitze, sitze, Biene: / gebot dir Sancta Maria.  
Urlaub nicht habe du: / zu Holz nicht flieg du,  
Nicht sollst mir entrinnen, / noch dich mir entwinden,  
Sitze vielmehr stille, wirke / Gottes Wille.
- 22) 例えば,  
Bien' und Wies' / setzt euch an Baum und Ries,  
setzt euch an Lov und Gras / und traget ein Honig und Wachs,  
damit alle Kirche und Kloster geziert werden.  
HWA <Bienensegen> の項
- 23) HWA. <Schlehe> の項。また、裏切った恋人の似姿をパン生地(Teig) かロウで作り、それを火あるいは蟻塚に投げ入れると、恋人が苦痛に苛まれるという。<Teig> の項。
- 24) 「呪術によって禍害(時には有益な事柄)をひきおこすもののなかで、一番目立つのが共感呪術である。象徴行為が現実化するの共感呪術で、だれでも憎むべき人間

野 島

をかたどった蠟人形の内臓に、赤く熱した針を通すと、その人間の腹がさしこんできて、体が衰弱するというのである。世界中の未開人種の記録を調べてみると、被害者が自分に向けられた呪いのことを知っていれば、それだけ効果が大きい。……記録に残っている裁判の証拠によると、魔女が共感呪術という罪状で告発される場合が多い。『呪術』p. 180.

参考文献（「森に蜜を集める人々」に同じ。新たに付け加えたもののみを示す）

Hoffmann-Krayer, E. (Hrsg.): Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Walter de Gruyter. Berlin und Leipzig. 1927.

Lurker, Manfred: Wörterbuch der Symbolik. Alfred Kröner Verlag. Stuttgart. 1983.

—————: Lexikon der Götter und Dämonen. A. Kröner Verl. 1989.

Erich, Oswald A./Beitl, Richard: Wörterbuch der deutschen Volkskunde. A. Kröner Verl. 1974.

Döbler, Hannsferdinand: Die Germanen. Bertelsmann Lexikon-Verlag, Gütersloh, Berlin, München, Wien. 1975.

Sprenger, Jakob/Institoris, Heinrich: Hexenhammer. 5. Aufl. dtv. München. 1986.

Bernhard, Marianne: Alte Wetterregeln. Wilhelm Heyne Verlag. München. 1984.

マンフレード・ルルカー著、池田紘一訳『聖書象徴事典』人文書院 1988

ジャン＝ポール・クレール著、竹内・柳谷他訳『動物シンボル事典』大修館 1989

アト・ド・フリース著、山下圭一郎他訳『イメージシンボル事典』大修館 1984

鈴木裳三『日本俗信事典』角川書店 昭和57年

手塚儀一郎他編『旧約聖書略解』日本基督教団出版部 1967

渡辺武男『薬用昆虫の文化誌』東京書籍 昭和57年

松浦誠『社会性ハチの不思議な社会』どうぶつ社 1988

梅谷献二編『虫のはなし』I, II 技報堂出版 1985

R.リーキー, R.レーウィン著、岩本光雄訳『オリジン』平凡社 1980

P.ヒューズ著、早乙女忠訳『呪術』筑摩書房 1970

市川健夫『日本の馬と牛』東京書籍 昭和56年

梅棹忠夫『狩猟と遊牧の世界』講談社 昭和57年

川田順造『サバンナの博物誌』新潮社 昭和56年

松谷健二訳『エッダ／グレイティルのサガ』筑摩書房 1986

蜜蜂と俗信

呉茂一『ギリシア神話』新潮社 昭和53年

グレンベック著，山室静訳『北欧神話と伝説』新潮社 昭和55年

泉井久之助訳『ゲルマーニア』岩波書店 1990